

ふるさとの民話（第四十三話）

『大木の天狗様』

天狗様とは、赤い顔をして、その鼻は、たいへん高く、ある面では、神様の代名詞に使われている。

天狗様が、ひとたび、その姿を現わすと、万物すべて、恐れて平伏するという。その天狗様が住居とするところは、大木の上である。天狗様は、酒を好み、いつも音楽を奏して、楽しむといわれている。

『荒牧の与平腰（今の、惣右エ門の孟そう竹藪付近）というところ一帯は、屋なお、うっそうたる樹木が、繁っていたそう。

ある時、商談がまとまって、その木々を伐ることになったそう。すると、その木々を切る直前になって、その木々に住まいしていた天狗様が、引っ越しをしなければならなくなったそう。ある晩、「ドンチャン、ドンチャン」と、にぎにぎしい音楽がなる中に、西の彼方の、「火の宮森」の方へ行ったそう。』と、言い伝えられている。

（現在も、「火の宮」というところがあります。）

（若林町 武内 喜男 集録）

